

No. 10622

陳志



事物に因あまの必ず果あるの天地の常經自然の通義

なり細言すれ天地間處事接物一に是れ皆な因果の

原則の相制也

東洋の東西を問はず時の古今を論せず大は一天下

の興廢は其の自

然の理也

興廢存亡するの日に興廢存亡するに

論ず其の自

惟みよ吾皇天御國の亞細亞の東部に位せる一小國

にして建國以來紀綱整格千古一轍國威嚴肅萬世不朽

にして外ハ外夷の侵奪凌辱を受るなく内ハ天位を覬
覬汚穢するの徒なく上ハ天皇陛下は造化天神の正
統皇祖太神の裔胄連綿として今日に至り下臣僚民
庶ハ忠純貞固敢て不二を抱くものなく渠ハ外夷各國
の弱肉強食優勝劣敗常なきものと遠く相懸隔卓越同
日の比に非す以て今日を致し各國の爲に相卷唇泰斗
視せらるる所以のもの豈偶然ならんや天祖立極懿
訓之を創め天神垂統淵謨之を傳へ列皇列聖之を承
け之を述へ蒼生黔首之を奉じ之に遵ひ君是れ一臣是
億兆君臣の大義ハ日月と並ひ懸り上下の名分ハ乾

坤と與に定る敬神尊皇愛國の志氣ハ粲然として
風を爲し温良恭謙讓の大典ハ律然として俗をなす國
体之れに因て尊嚴蒼生之に因て安寧土壤之に因て淑
靈風氣之に因て淳美紀綱之に因て整格國威之に因て
嚴肅外夷之に因て相企及し能さる處あり然るに
然るに如今吾國の形勢や外ハ列國に對峙し外交日に
織るか如く之に加るは鄂羅北に驚翔するあり支那西
に龍蟠するありて近く土壤を呼應の間に接し其蟠る
者の千里に伸ひんと欲し翔る者は九霄に達せん事を
期し屹々として渴者の飲を需むるか如し餓者の食を

望むに異あらず而のみあらず英に佛に獨に墮に又各々先を争て鳴意を東亞に傾け或は宗教征略に或は兵馬征略に刻意以て英の印支緬に於ける佛の支安に於けるか如く實に吾國將來の休戚に一大干繫せざるな

翻て内狀を視察するに所謂仁君の下に賊子出すと云ふか如く國民永く至恩の徳に沐る大平の澤に浴するの餘波風俗日に浮華よ流れ徳義月に地を掃ひ快樂に馴れ遊惰に荒み傲ることを知て勉むるを知らず區々目を内に注いで意を外に注かす農の舊に染み商は新

に後れ恬として意に介するなく或は小成に苟安して百年の大計を忘れ或は小利に眩惑されて千歳の利源を顧みず或は妄想自由よ泥みて眞正の權利を誤り其甚しきに至りては言に侃々諤々の議を唱ふるも行に信義廉耻を破るもの則ち胡越も利を見れば前に進みて相親和も骨肉も害を見れば後に退き相仇視し功を共にして之を己に歸し禍を同して之れを人に委ねんとする怯夫懦婦も亦愧つべきの醜狀漸く俗を委し敢爲進取の氣象は何處にか蟬脱し去り彼れに是の内訌外患交々至り國歩の前途累卵も管あらず猶薄氷

を踐むか如し不肖澤之助等憂慮茲に至れば血涙淋漓
肝爲に烹へ肌爲に戦き奮慨措く能はず今よして優柔
不斷苟且偷安を是れ事として敢て經國濟世の策を講
じ以て之れか救援匡醫するなくんか恰も國家の土崩
の如く殆ど底止の術なきよ至らん要するに國家の現
狀其茲に至りたるものは至りたるの日に至りたるに
非を蓋じ大よ因するあり何うや抑吾國の元氣たる
天訓皇謨則ち惟神ある神道の氣運夙に萎靡頽廢を
敬神尊皇愛國の大義名分地に落るの致を處斯道
萎靡して振はず大義名分擧て地を掃ふに至らむる

ゆのは是れ一般人民をして苟も斯道の天訓皇謨國家
の元氣にして天爲の憲法天下の精神なることを覺ら
せ免す啻に彼の過現未三世因果の説を爲せ人爲の宗
教を一般の觀を抱ふにむるに起因する所なり
試に斯道をして一般宗教視するは國家に大害を醸胎
せるの所以を説かん夫を宗教なるものは各自其宗教
をして一心一向に之を奉崇せしむるものにして未だ
甲の宗教を崇敬し又乙の宗教を奉遵するものは斷じ
て之れあらざるなり而宗教は彼れを奉するも是れを
崇するも是れ各自由任意の元則あるものにして而宗

教ハ甲宗ハ力めて乙宗を辨駁シ乙宗は強て甲宗を難詰シ各自自己の宗教をして隆盛ならしめんかため他の宗教を顛覆壓倒せんとするの性質を含有す而其辨論難詰以て其意を遂る能はされし遂に手段を腕力ハ假り勝敗を干戈の間ハ決せんとするの優勝劣敗なる殺氣を有す看よ第十二世紀より第十三世紀の交一百餘年間歐洲全土の鮮血川を爲し死屍山を爲せるもの近くは支那印度安南緬甸諸國の滲澹たる苦境に沈淪せるもの一ハ是れ皆宗教の餘燃に起因せざるならし魯帝アレキサンデル第二世臨終の言ハ云ハ後や方今の

東洋征略ハ已に兵馬の干戈にあらすして宗教の干戈にあり云々是れ又宗教ハ強食弱肉無形奪國の軍器にして遠く爆發火藥の右に出つるの干戈なること亦た論を俟たず故に歐米各國苟も目を東亞征畧に注ぐものハ魯と云ハ佛と云ハ英と云ハ米と云單に宗教征略を以て國是とし國帑を傾多敢て踟躕するなく先を争て續々耶宗宣教の師を我亞細亞全土に派出せしめ汲々布教に怠らす已に吾國に於ても其鋒先を争はるの地となり以て盡日徹夜戴星蹠月東西縱横し奔走出没し只管信徒糾合に刻意せるに非や此時に當りて假

に吾 惟神なる神道を以て一種の宗教視せんか吾國
人民の理として苟も吾國體たる 天訓皇謨則ち天爲
憲法に向て信せるよ否との各自々由任意ならざるを
得ざるに至らん猶甚むきに至りては吾國人民にして
一の宗教信徒たらしめ斯道に向て辨駁難詰之れが顛
覆壓倒せんことを力むべし若し意茲に至るを得ざる
に於ては遂に最後的手段腕力を以て勝敗を干戈の間
み訴ふるや亦豫期すべからん然り而第一其慘毒を蒙
るものは誰れを言卷もかたてかれと吾一天萬乗と欽
仰し奉る 至尊の玉體にして延て吾同胞三千八百有

十

余萬の蒼生か塗炭の苦界に陥り親にして其子を失ひ
同胞おして其兄弟を失ひ妻は街頭に流浪し兒の餓渴
お號叫びるの云へからざる慘狀を呈出せん噫殷鑑遠
からず豈に只た埃及土耳其のみならんや縱言すれば
吾人にして吾國の元氣たる 神道を以て一種の宗教
視し敢て顧みざるに於ては其餘波遂に國體を蔑如し
敬 神尊 皇愛國の大義報本反始の誠意則ち倭魂日
に月に滅殺消耗し名狀をへからざるの地お至らん豈
猛省せざるへけんや
幸にして此の積極的の弊害を見るに至らざるも若し

吾國人民にして神道を宗教視し斯道の眞理則ち建國の体王土王臣の大義を覺らざるに於てハ邪教爲に其隙を窺ひ手に唾して人心を籠絡し着々猖獗を逞と敬尊神皇愛國の元氣を蠶食し爲に人心ハ叨りに歐米各國比皮相現状を心醉羨望し或は昨賊今王規律整肅たらさるか或は沿革の事蹟に因り各々其建國の体を異よせるは事實あるをも覺悟せず架空妄想も亦甚むき説をなし亂に自由を唱へ暴りに權利を鳴らし吾立憲政体の組織ハ將に斯道則ち天訓皇謨に基き臨機其宜きを裁ち以て臣民の權利を優重あらむ

其公議を伸暢せんとせらる、優渥なる聖慮に出たるを辨せず露々口を極めて或は生殺與奪宣戰講和外交訂盟比大權をして公衆に委せしめんとするか如き或私に國約憲法の制定を議するか如き非望を覬覦するの徒或ハ之れおきを保せず遂に上下軋轢其方向を一にせず上の好む處ハ下之れを惡み上の惡む處ハ下之きを好み人心恟々四分五裂各々其執る處の主義を以て黨派を分ち甲黨の利とする處ハ乙派必ず之を害とし互に努々其黨派の雌雄を争ひ其弊遂に國家の利害得失を顧みず偶々全國議員を招集し公議輿論を求

其自然を命と云ひ其必要を性と云ふ則晝夜の運配春秋の生剋よりして君臣の義父子の親に至るまで皆之れに起因し茲に至りあるものにして人爲の克く得て左右し得へきも此にあらず又時世の變遷に因て相異動するものに非ざるなり以上概言すれば道は天地の公道世界の精神にして終古不易萬世不朽依らさらんと欲すと雖とも得へからざるもの之れなり故に道は苟も變ずべからず變ずへき道に非ざるなり
 宗教は夫に之れと異なり則ち時の古今國の内外歴史の成否土地の肥瘠人情の善惡人智の進度等に因て各

々之れか鐵路に變更を來さざるを得さの人爲の方便法にして昨の是とする處は今の非今の正とする處は昨の邪只能く世と推遷るもの故に星羅碁列數ふるに違あらず而各々天地の公道に依て之れか方針を立てるの元則あるにも拘らず彼の善は是の惡甲の明は乙の暗區々として其主義一定せず左せんとするものあれば右せんとするものあり東するあり西するあり各々其信向を異にし依るも依らざるも自己か任意なるものにして而天の性命維れ隨ふもの未之れあらざるなり道へ苟も離るへからず離るへきは道にあら

さるなり神道は天神天祖の遺訓其本天理の
 夫れ此の如く神道は天神天祖の遺訓其本天理の
 自然に出で終古不易宇宙唯一天壤と窮なき世界の元
 氣吾國々体にして依らざらんと欲すと云とも得へか
 らざる天地の公道なり故に彼の所謂朝三暮四の宗教
 は非るや亮々として明なり以上要するに吾國の建國以來宇宙に其比を見ず萬國
 は卓越する所以のもの蓋も偶然にあらず大に起因
 茲に至りたるもの則ち吾國々体ある天訓皇謨則天
 爲憲法を欽仰すべき神道の存立あるあるに因す故

苟有斯道の隆替存亡は則ち國家の興廢休戚に一大
 影響するに歴然として此の如く日を睹るとりも明な
 り天下之れに適へは以て興り之れに違へは以て廢る
 一家之れに従へは以て存も之れに従はされへ以て亡
 ふ物亦未あり事終始ありとは此の謂なり大藏大臣松
 方伯の言に凡そ世に花と云ふ花を見るに皆其特性か
 ありて一様ではない牡丹に牡丹の花かあり芍薬に
 の芍薬の花かある然れに牡丹の花を摘みて故さらけ
 芍薬の枝は咲せうとするは天然の理にも背ける如く
 國にも國の姿あり家にも家の姿あれは必ず他國他家

の風を採りて強て移さへきていよいよ唯た其のもとの
姿にて短さの長くもじ足らぬは補ひもし草木をたほ
し立つるが如く其儘にてたほし立つへきである云々
實に此言の如く始終の闡明をもて其の効空もからさ
らしめり或は經國濟世の緒を得る敢て難きに非さら
んか嗚呼吾土地人民の天皇の有奄する處にもて
王土玉臣の義古典に照るたり然れり則苟も斯土の
皇祖經營の地にては斯民は神孫蕃殖の民ふれり今に
じて奮發興起し苟且偷安の怯量を捨て神國固有の元
氣を敬し神尊皇愛國の大義名分則政命を守り大

神明を敬し王事を勤め學藝を研き殖産を勵み衛生
を慎み兵事を練り百般勤むる事を主として富國強兵
の基を復古し國威をして隆盛ならしめ上下協心戮力
勸善懲惡互に相扶助救援し入てり孝出てり忠若し斯
氣の乏じきものあらば至誠真心之れを誘導感化し以
て其風俗を淳美にし一朝事あらば則ち妻子を率て純
忠を盡し丹心誠意邦國を愛護し以て我國固有の國体
を永遠に保ち光威を萬國の上に輝さんことを不撓不
屈身命を碎粉にし吾神州を枕にし七死七生以て國難に
殉ふる敢て爲進取確固不拔の義氣を鼓舞せしめ吾の旭

明治廿一年六月六日刷成
同廿一年六月八日御届

非賣品

著者兼
發行人

廣嶋縣平民

西澤之助

東京々橋區築地貳丁目
貳拾五番地寄留

印刷人 高瀬原良知

京橋區灘山町七番地

印刷所 瀨關社

京橋區灘山町七番地

2

172
5
39

014395-000-4

特17-282

陳志

西澤之助 / 著

M21

ABB-0763

